



大学院経済科学研究科の コンピュータ・グラフィックス研究

大学の講義の形態は大学設置基準で決まっています。従来は対面式の授業形態が想定されていました。少人数で教師が家庭教師のごとく学生に懇切丁寧な指導することが最も大きい教育効果をもたらすと思われる。しかし、今日では授業を受ける対象も一様でなく、また指導する側も授業の展開について様々な工夫が求められるようになった。本学でも若手の教員が教材のデジタル化や授業におけるホームページの活用など、いろいろな工夫をされる時代になっている。今回紹介するのは大学院経済科学研究科で、この8月実施された遠隔授業の事例である。

平成9年12月大学審議会の答申「遠隔授業の大学設置基準における取扱い等について」によって、新しい通信技術やマルチメディアを用いた遠隔授業の法律面が整備され、新たな可能性が開けてきた。遠隔授業は単に教師が教室とは別の場所にて授業をするというだけでなく、授業展開のための教材作成、デジタルコンテンツ化、ホームページを利用したWBT(Web Based Training)システムの運用などが不可欠である。学生たちは授業以外でもこれらの授業コンテンツを利用して授業の理解を深めることができるのである。大学の授業において時間と場所に制約されない「ユビキタス時代」への対応が求められるようになっている。

経済科学部では2001年度後期から、将来の新しい授業のかたちを模索する試みの一つとして、専門科目担当の非常勤講師による講義の一部において遠隔授業を実験的

に実施してきた。本学経済科学部の私と広島市立大学情報科学部大場充教授の共同研究がその一つで、授業におけるオンラインビデオ、WBTシステムやテレビ会議システムなどを利用して、どのような授業形態が学生に受け入れられやすいか、系統的に検討している。

このような経緯もあって、大学院経済科学研究科の「コンピュータグラフィックス研究」でも授業の一部で遠隔授業の方法を取り入れることになった。担当は、東京大学大学院、新領域創成科学研究科の西田友是教授である。教授は、リアルなコンピュータグラフィックス(CG)画像生成法としてよく知られたラジオシティ法の開発者の一人であり、CGの分野で世界的に権威のある国際会議SIGGRAPHにおいて日本で最も多数の論文を発表されている(12編)。今年度の授業は、8月3～6日の間に集中で行われ、前半3～4日の授業が東大からの遠隔授業、後半5～6日の授業は本学にて対面式で行われた。西田教授はCD ROM付きのテキストも書かれており、ホームページ上にも沢山のコンテンツを公開されている。これと地元広島の会社が開発したテレビ会議システムおよびWEBカメラを併用して授業を展開された。なお、教授の開発されたJavaによるCG教材は情報処理学会から2002年度優秀教材賞を授与されている。図はJavaレポートとして提出した学生の課題例である。授業では学外からも授業見学の申込みがあった。本学の卒業生であればこの授業の受講は可能である。所定の手続きを踏まれて一度チャレンジされて見るのも面白い。



経済科学部長
廣光 清次郎
(ひろみつ せいじろう)

